

学会参加報告

Meeting Report Wee11U 3 K6, 0L1



根津 修
先端生命科学専攻
博士3年

イスタンブールでの国際学会にて

2008年8月10日から15日に、トルコのイスタンブールで開催された国際ウイルス学会(XIV. International Congress of Virology)に出席しました。国際ウイルス学会は3年に1度行われる、ウイルス学領域最大の学会です。今回私は初めて国際学会に参加しましたが、私の専門である植物ウイルスの世界的権威の方々と直接議論できるチャンスでしたので、参加前から気分が高揚していました。

歴史ロマンの街、イスタンブール

飛行機の到着が朝6時ということと初日の大会開始レセプションが夕方からと言うこともあり、到着初日にまずイスタンブールの街中を探訪しました。開催地であるイスタンブールはローマ帝国のコンスタンティヌス帝が首都を遷都した頃から東西交易路の要衝として繁栄した歴史ロマンあふれる街です。また、イスタンブールはボスポラス海峡を挟んでアジアとヨーロッパが交わる地であることから、様々な文化が入り乱れ、独特の風土を醸し出していました。そのためか、現地の人々は自国に強い誇りを持ちつつ、とても気さくで、街行く人や商店のおじちゃんなど、とても親切に接してくださいました。また、トルコ料理は世界三大料理の1つですので、ドネルケバブのような有名なものから、現

地でしか味わえないものまで多種多様であり、毎日素敵なトルコ料理を堪能することができました。お陰で体重が増加しましたが、五臓六腑までトルコ文化を堪能できた気がします。

波乱尽くしのポスター発表

トルコの街を楽しむのも束の間、いよいよ学会がスタートしました。今回の発表は出国前から波乱続きでした。まず、発表内容が掲載されている要旨がネット上で発表されたため確認すると、なんと私の情報が一切なかったのです！至急メールを出すも返事がなく、仕方がないため直接大会本部に乗り込んで対応を迫ったところ、「大丈夫！発表の場所も用意しますし、要旨の別刷りも用意します！」との約束をしてくれたため、安心して翌日の発表を待ちました。しかし、なんと私の発表場所は用意されていなかったため、その場で場所を確保し、なんとか発表に漕ぎ着けました。さらに、要旨別刷り用の名簿に名前と発表タイトルをきちんと書いたにも関わらず、出来上がった別刷りには再び私の名前が無く、再度大会本部にねじ込んで、なんとか私だけの別刷りを作ってもらいました。どうやら私と同様のトラブルに見舞われた研究者が沢山いたらしく、偶然そのトラブルを引き当ててしまった自分の籤運の悪さを痛感しましたが、ボキャブラリー

海外研究者との交流

国際学会では、午前中に講演があり、ランチの時間にポスターセッションが行なわれ、さらに午後に細かいテーマに分かれて口頭発表が行なわれました。私はポスター発表でしたが、要旨に名前が載っていなかったにも関わらず、通りがかりの多くの研究者が興味を持ってくださり、制限時間一杯一杯まで議論を交わすことができました。国際学会の醍醐味は、普段論文でしか名前を拝見したことのない著名な研究者と直接お話ができることですが、私も多くの研究者と議論する機会に恵まれ、非常に有意義な時間を持つことができました。また、普段実験室に籠って研究を行っていると、自分の研究の意義や方向性に不安を覚えることもあるのですが、多くの海外の研究者と接することで、研究の新たな着眼点や競争心など、様々なものを得ることができた気がします。そういった意味でも、国際学会への参加は普段の国内学会では得られない、大変貴重な体験だったと思います。今後も、国際学会で発表を続けていけるような研究を行なっていきたいと思います。



今回、学会参加にあたり新領域学術研究奨励金より海外渡航費用を援助して頂きました。このような支援のお陰で国際学会に参加できる素晴らしい機会が得られたことを、この場を借りて御礼申し上げます。



スルタンアフメット・ジャーミイの前にて



ポスター発表風景